

## 〈韓国と北欧の学校図書館見学記〉

# 中央女子中・高等学校図書館、蘆原こども図書館 および蘆原情報図書館（ソウル）訪問記

松 山 巖

2006年8月20日～24日に韓国・ソウルで世界図書館情報会議（World Library and Information Congress）＝第72回国際図書館連盟（IFLA）大会が開催された。筆者はこの大会に出席して標記の3図書館を見学する機会を得たので、ここに報告する。なお、各学校の現況などは2006年8月現在のものである。

### 1. 中央女子中・高等学校図書館（私立）2006. 8. 23訪問

まず、同校の概要を記しておく。（当日の説明に加え、末尾に示した複数の情報源の内容を総合した。個々の出典表示は煩雑になるため大部分省略したので了解されたい）

所在：서울특별시 서대문구 북아현동 190-2

[ソウル特別市西大門区北阿峴洞190-2]

開校：1940年10月 日本の植民地統治時代、京城家政女塾として開校

1946年中央高等女学校、などを経て1951年より現在の校名（中・高）

校長：ミン・テヒョン（민태형）（第11代）

教監（教頭）：中学 キム・ガンイル（김강일）、

高校 ナ・ドンチョル（나동철）

司書教師：徐敬恩（ソ・ギョンウン＝서경은、女性）

当日の通訳（英語、高2－7担任）：ヤン・ヒョン（양현、女性）

校地の現況（単位：㎡）

土 地		建 物							
種別	面積	区分	地下	1階	2階	3階	4階	5階	計( )内は高校専用
校 地	1368.0	西別館	88	343	547	547	547	17	(2089)
体育場	2595.6	本 館	301	301	1194	1262	1233	1262	5243(4353)
計	3693.6	科学館	588	830	592	830	830	820	4490(4497)
[松山注 上記の数字には若干の疑問あるも情報源のまま掲載]		体育館		1174					1073( 678)
		安静所		177	169	169			515( 303)
		計	977	3747	2541	2807	2610	993	13675(8930)

中学 学級数及び生徒数

学年	組	1	2	3	4	5	6	合計
	1	37	36	36	36	36	36	36
2	37	37	36	36	36	36	36	218
3	32	32	31	31	32	32	32	190
計								605

高校の詳細は不明だが、各学年とも10組まであり、在校生は約1000名である。

なお、2007年度は学級数は同じであるが、中学全体の生徒数は552名である。

教職員数

		校長	校監	部長	教師	講師	小計	庶務職	技能臨時職	小計	合計
中学	男	1	1	6	9		17	1	3	4	21
	女			5	10		15				15
	計	1	1	11	19		32	1	3	4	36
高校	男	(1)	1	4	21		27				
	女			2	25		27				
	計	(1)	1	6	46		54	?	?	?	

このほかに純粋な事務職員がおかれている。

## 教室現況

科別	種 別	室数	科別	種 別	室数	科別	種 別	室数
家庭科	普通教室	30	体育科	体 育 室	1	管理室	校 長 室	1
	裁 縫 室	1		準 備 室	1		庶 務 室	1
	準 備 室	1		更 衣 室	1		教 務 室	3
	調 理 室	1	特別教室	図 書 室	1		相 談 室	1
	会 議 室	2		民 俗 室	1		教 養 室	1
理 科	理 科 室	3		放 送 室	1	印 刷 室	1	
	P C 室	1		編 集 室	1	宿 直 室	1	
音楽科	音 楽 室	2	生 徒 会 室	1	休 憩 室	1		
	国 楽 室	1	視 聴 覚 室	1	給 水 室	1		
美術科	美 術 室	1	映 写 室	1				

## ○図書館概要

面積：100坪（教室5つ分）

蔵書：単行本25,000冊（+500～600冊／年）、逐次刊行物70タイトル、視聴覚・電子資料1500点

閲覧：図書館内の全資料が閲覧可

貸出：一般図書・雑誌は貸出可、辞典・画集・楽譜等の参考資料及び漫画は室内閲覧のみ可

### 貸出限度

在 校 生：2冊 7日（7日延長可能）

教 職 員：20冊 60日（60日延長可能）

父 母：5冊 30日（15日延長可能）

地域住民：3冊 10日（5日延長可能）

### 利用時間

在校生・教職員

平 日 8：00～19：00 土曜日 8：00～14：00（日、祝休館）

地域住民

火～土 13：00～19：00 日曜日 10：00～19：00（月、祝休館）

## 父母読書教室

木曜日 10:00～12:00 4月～11月（夏休み除く毎週、全20回）

### 運営体制

司書教師（常勤、専任） 1名

行政事務 2名

在校生・父母のボランティア

（当日の説明では地域住民も加わるとのことだった）

★韓国的高校では、在校生のボランティアグループとして「図書班」というものがあることが多い。これは、日本でいえば図書委員会＋文芸部＋図書館研究部といったところであるが、在校中の特別活動として記録される点で、日本の生徒会執行部的な側面もある。本項の図書班員も、カウンター業務や整理業務などと並んで、図書館関係の博物館を見学したり、読書会を行って読後感を相互に発表し合うなどの活動を行っている。

当日、外国人参加者から「図書班員になるために何らかの qualification が必要か」というような質問が出ていた。しかし、質問者の英語能力の問題もあり、何回か学校側に聞き返され、結局はよく理解されなかったようだ。私はそのとき聞いていて、「班員になってから、仕事をさせてもらえる前に、資料組織法や図書館サービス論など、司書課程入門のような講習会を受ける必要があるのかどうか」という質問をしたかったのではないかと思った。しかし、今考えると、班員として選ばれるまでのプロセスについて尋ねていたのかも知れない。

### 組織化のツール

分類：KDC、目録規則：KCR4、

使用 MARC：KORMARC（国立中央図書館）

○図書館の沿革（この項、主として『司書教師の専門性の向上』による）

1956 半開架式図書館として設置（27.5坪、72座席）。

1964 常勤の司書教師（ただし授業も12時間担当）1名配置、完全開架式に。

- 1970年代 全国的に学校・父母の関心が大学入試に移る中、本校も図書館沈滞期に。読書環境の劣悪化。
- 1980年代 学校図書館の暗黒期。  
夜間の補習時間に、図書館で借りた本を生徒が持っている「読んでしまうから」と担当教員に本を取り上げられ、翌日図書館に返却されたという。
- 1983 そんな暗黒期のまっただ中に、徐敬恩氏、司書教師として赴任。併設校の大学図書館も兼任。  
補助司書2名、アルバイト（4年生図書館学科卒業）1名、勤労奨学生4名
- 1988 冷暖房設置、土曜日午後・日曜日・休暇中も開館（ただしほとんど自習室として）。
- 1992 空き教室（2.5教室分）を図書館に改造。
- 1993 KOLAS<sup>(1)</sup>を用いた電算化開始。
- 1994 大学入試制度の変更（修学能力試験<sup>(2)</sup>の実施）により学校図書館への関心高まり出す。  
「本を読むことが大学入試に役立つという発想の転換が、瀕死の学校図書館に、針の穴ほどではあったが希望をもたらした」（徐敬恩氏）
- 1996 大学図書館に常勤司書を配置、中・高図書館は徐敬恩氏（専任）と行政事務職員1名で担当。
- 1998 奨学官（教育の企画・調査・指導・監督等を行う教育公務員）より、読書指導が不十分だとの指摘。  
読書指導が、単に図書館だけ、国語科だけで行えばよいものではないことを確認させてくれた事件。99年より教頭を委員長とする読書指導研究チームを結成（現在に至る）、学校全体の読書計画作成。  
図書館でも読書閲覧貸出証を発行し、読書活動の激励に活用（後述）。  
多読者には売店で使える商品券を発給。
- 2001 生徒用コンピュータ設置。
- 2002 図書館のウェブページ開設(<http://www.centerlib.org/>)。資料検索可。

教育人的資源部、「よい学校図書館作り—学校図書館活性化5箇年計画」策定。

この計画は、2003年～2007年の5年間で3000億ウォンの予算を投入して全国の小・中・高校の学校図書館環境を改善しようというもので、人材確保、施設改善、蔵書拡充などが行われる。

- 2003 学校図書館活性化支援事業の対象校に。半年かけて教室移転、第1次リモデリング（設備の改修・補修。日本風に言えばリニューアルというところか）。

5箇年計画の初年度にあたる本年は、政府の補助金を活用して全国で1259校の学校図書館がリフォームを実施した。これは全学校数の約12%である（ちなみに申請数はその2.1倍の2645校にのぼった）。

- 2004 図書館を活用した授業を本格的に計画・実施。2006年現在、6科目が参加。多い週では25時間、図書館を活用。

- 2005 「父母読書教室」開始。半年で20回、文集発行、展示会。参加者の中から図書館ボランティア誕生。



2005. 5 IFLA ソウル大会の公式訪問館に選ばれる。

- 2006 地域住民に図書館を開放。そのため、第2次リモデリングを行い第2閲覧室（40席）を増設するとともに、職員1名追加。

父母による図書館ボランティア（装備作業と思われる 写真は同図書館ウェブサイトより）

2006. 8. 23 IFLA ソウル大会の図書館訪問。

## 当日のようす

IFLA 大会会場の COEX 1階に午前9時集合。目的地別にそれぞれのバスに乗り込む。1時間ほどかけて、ソウル市の中心部よりやや西にある中央女子中・高等学校の校庭に到着。

校庭や校舎の雰囲気は日本の私立女子中・高校と非常に似通っている。校舎の外壁や廊下などにモスグリーン系の塗色がされており、日本女子大学付属豊山女子高校を思い出させる。

階段を3階まで登ると図書館の入口である。掲示板には IFLA 大会のポスターが2枚と、利用時間案内や授業で使用する時間割などが貼られている。「^\_^ 休み時間も常に開いています! ^\_^」という掲示が嬉しい。

まず校長からの挨拶、続いて司書教師の徐敬恩氏からの説明があり、英語の先生が通訳する。その後は自由見学となる。

書架の蔵書の年代をざっと見たところ、「相当古いもの(~1960年代)」と「ここ10年ぐらいのもの」が中心であり、「図書館の暗黒期」が現れているようだ。日本の小・中学校の図書館でも、最近になって慌てて蔵書を整備し始めたところがよく見られるが、その雰囲気に近いものがある。



請求番号は中学・高校には非常に詳しく、著者記号・図書記号を用いて1冊単位で識別できるようになっている。

古めの図書が多い書架（新しい図書は別の所があり、主として回転式書架に収められている）

図書館情報学の棚が充実しており、『韓国目録規則変遷史』（韓国図書館協会）まで置いてあったのにはびっくりした。しかし、返却期限票は白紙。おそらく、半分は業務用に買ったのであろうか。

貸出方式は、いわゆるニューアーク式に近い。個人カード（図書閲覧貸出証という）に請求番号・書名・貸出日を書いてカウンターに出す。しかも、そのカードは窓際のケースに、クラス・番号・氏名のある面を



クラスごとに仕分けされた図書閲覧貸出証

表にして、中1から高3までクラスごとに並べて置いてあり、いつでも誰のでも見ることができるのだ。おまけに顔写真まである。

卒業生に「プライバシーの問題はないのですか」と尋ねたところ、「見られて困るような本は借りないですから」といって笑っていた。「それに、女子校だからという面もあるでしょうね。男子がいると、読んでいる本を見てからかわれたりするかも知れませんか」とのことであった。図書館の自由がシビアな問題として意識されることがないのは、生徒同士や教師と生徒との間で、読書について信頼関係があるからなのであろう。

カードは2つ折りになっており、両面で4ページ。そのうち3ページが読書履歴簿になる。3ページ全部が埋まると、校内の売店で使える商品券がもらえる。カードは卒業時に個人に返却される。

ちなみに、沿革を見ると分かるとおり、ここは高校の図書館としてはかなり早い時期から KOLIS（現在は KOLIS II）という電算システムが導入されており、実際の貸出手続きはカードに付けられたバーコードを用いて行う。したがって、ニューアーク式の記入欄は不要なはずだが、それをあえて残しているわけで、読書指導の一環として読書記録をきちんとつけて、お互いに公開し合おう、というポリシーの強さを感じる。

閲覧室を出ると、別の閲覧室につながる廊下だったところがリニューアルされて、椅子やテーブルが置いてある。ブラウンジングルームというそうだ。「座った後、椅子は正しい位置に整頓してください。美しい人は居場所も美しいのです」という注意書きがあった。

廊下の天井から下がっている木札には「行く挨拶、返る嬉しさ」（こちらから挨拶をすれば、嬉しさが戻ってくる）という標語が書かれていた。浄水器のところには、「中央人は文化人です。浄水器の清潔のために、いつも自分のコップを使う。口を付けたり手を洗ったりしない。床に水を散らさない。周りにゴミを捨てない」と書かれていた。

一体に、韓国で見かける標語や注意書きにはしばしば開いての自尊心に訴えかけるものがよく見られる<sup>(3)</sup>。それに加えて、女子校のためか、立ち居振る舞いに関するものが多いように思われた。

各教室の外の廊下には、食缶などを載せた配膳車が置いてある。そう、こ



こは給食があるのだ。

案内してくださった卒業生のソン・ミンギョンさんは、韓国外国語大学日本語科の4年生。日本人と変わらない実に見事な日本語を話す。

そうこうしているうちに、あっという間に1時間が経過。追われるようにしてバスに乗り込んだ。

## 2. 蘆原（ノウオン）こども図書館（노원어린이도서관）、

### 蘆原情報図書館（노원정보도서관）

翌日（2006年8月24日）の夕方～夜にかけて、今度はソウル市の北の外れに近い、蘆原区立の2つの図書館を見学した。

#### こども図書館の概要

本館は、ソウル市蘆原区が、地方自治体としては全国で初めて設立した、小学生以下のための図書館で、ソウル女子大が委託運営に当たる。

開館：2003. 2. 20

館長：朴美英（パク・ミヨン。ソウル女子大学情報メディア学部文献情報学科教授）

利用時間（資料閲覧室、幼児閲覧室、デジタル資料室とも）

月～金 9：00～18：00（火曜日は休館）

土・日 9：00～17：00

利用者登録：ソウル市民であること。

貸出：3冊、14日間まで（延長：1回に限り7日まで）

施設

3 階：館長室、デジタル文化開発室、講堂、園庭

2 階：児童閲覧室、電算室、読書教室

1 階：展示室、幼児閲覧室、休憩室

地下1階：デジタル資料室、こども文化教室、資料保管室、機械室

#### 情報図書館の概要

ソウル市蘆原区が、地域住民の文化施設拡充のため設立した、21世紀の知

識情報化を先導するユビキタス図書館。ソウル女子大が委託運営に当たる。

開館：2005. 11. 14

館長：朴美英

利用時間

	平 日	土・日
親子閲覧室、逐次刊行物閲覧室、 視覚障害者用閲覧室	9:00～18:00	9:00～17:00
総合資料室、デジタル資料室	9:00～20:00(3～10月) 9:00～19:00(11～2月)	9:00～17:00
一般閲覧室	7:00～22:00(3～10月) 8:00～22:00(11～2月)	

休館日：第1・第3月曜日、祝日

利用者登録：ソウル市民に限る

貸出：一般図書は3冊・14日まで（延長：1回に限り7日まで）

施設：地下1階、地上4階（ ）内は座席数

4 階：一般閲覧室（373）

3 階：デジタル資料室（83）、視聴覚室（60）、  
コンピュータ学習室（24）、文化教室（24）

2 階：総合資料室（80）

1 階：児童閲覧室（60）、親子閲覧室（30）、視覚障害者用閲覧室（5）

地下1階：逐次刊行物室（30）、売店・食堂、事務室、書庫

PC61台、プリンタ3台、衛星放送受信TV3台、

DVD/VTR兼用プレーヤ3台 等

蔵書現況

図書50,082冊、ウェブコンテンツ4589点、DVD1261点、CD-ROM337点、  
点字図書3769冊、雑誌126タイトル、新聞21タイトル

## 当日の様様

COEX 西出口の外に18時10分集合。大型観光バスの車体側面に張られた横断幕に、ハングルと英語で「ノウォン子ども図書館訪問を歓迎します！」の

文字。

車内の座席の背中には、またもや面白い注意書き。「御利用ありがとうございます。ごみは袋に入れて正しく処理し、観光文化人としての矜持を持ちましょう」。

蘆原区はソウル市の中でも北方に位置する、いわば郊外のベッドタウン的な地域で、ちょうど帰宅ラッシュと重なってしまい、途中でちょっとした渋滞に巻き込まれ、図書館に着いたのはすでに19時40分。当然、本来の利用者である子どもたちは残念ながらいない（18時閉館である）。

最初に最上階の3階までのぼり、講堂で図書館紹介のDVD（4分間）を見る。利用者の声で、小学生高学年くらいの男子が将来の夢を聞かれて「ビル・ゲイツのような人物になる」と発言し、場内どっと受ける。

その後、各階の閲覧室を見学しながら下りてくる。2階、児童閲覧室の雑誌ラックにハングル版「エコノミスト」が置いてあり、参加者の中に「さっきのような、ビル・ゲイツになりたい子が読むのかな」との声も。しかし、雑誌を整頓してみると後ろから「大人用教養雑誌置き場」の文字があらわれ、一同納得。

利用者はこどもやその保護者に限定せず、ソウル市民であればだれでも登録可能。館内は全般に明るい色調で、サインの言葉づかいやちょっとしたデザインなどにも、こども向けの気遣いが感じられる。

一通り館内を見たあと、情報図書館へ移動。バスに乗って数分程度と、さほど遠くはない。こちらは近未来的なデザインの建物が夜空に白く浮かび上がり、まるで不夜城という言葉が似合いそうである。22時閉館なので、利用者はまだたくさんいる。

まず地下の食堂へ行き、遅い夕食とする。（なお本来の食堂の営業時間は11：



2階児童閲覧室入口（右側の看板に「本を読むと楽しい」「シーッ！図書館で静かにすると私たちみんな幸せです」と書かれている）

30～18：30、売店は8：30～18：30である。今回は見学ツアー参加者のために特別にバイキングを用意してもらったものであり、一般利用者はいない。)

「情報図書館」という名称から、電子資料やネットワーク情報資源ばかりの図書館を想像してはいけない。1階には、4000冊の図書をもち親子が一緒に読める「母子閲覧室」、2階には哲学・科学・文学・実用書等5万冊の蔵書をおさめる「総合資料室」がある。電子資料やネットワーク情報資源「も」利用できる図書館なのである。

もちろん、それらの情報資源は従来の図書館より大幅に重視されており、「デジタル資料室」が3階の全フロアを占めている。ずらりと並んだ約80台のパソコンでは、インターネットのアクセスやフルテキストデータベース検索のみならず、文書の作成やプリントアウト、DVDの視聴まで可能である。日本のイメージでいう



デジタル資料室に並んだPC用ブース

と、単なる図書館のPC室というよりは、ちょっとしたビジネスセンターやネットカフェに近いかも知れない。簡単な検索などの短時間利用者のために、椅子が置かれていない立席のコーナー（8台）もあった。ノートパソコン持ち込みコーナーもあり、6脚並んだ黒の革張りの椅子は座り心地良さそうである。

4階は373席もある一般閲覧室である。この階には資料はなく、テーブルやキャレルだけがワンフロアいっぱい並んでいる。ざっとみたところ、必ずしも図書館の資料を利用している人ばかりではないようである。かつて日本でも多く見られた「学生のための席貸し」「受験用の自習室」に近い印象を受けた。その上、一般閲覧室では「飲食物の摂取は慎んで



一般閲覧室 閉館20分前の夜9時40分になってもにぎわっている

下さい」という注意書きがあるが、机やキャレルの上にはあちらこちらにペットボトルや飲み物の缶が置かれていた。午後10時の閉館が近づいてもかなりにぎわっており、年齢層は高校生～大学生が中心のようだが、中にはビジネスマンとおぼしき人もいる。中学生程度の女子2人組が時間を気にしながらロッカーから荷物を取り出して急ぎ足で帰って行った。(ちなみに小学生以下はここでは母子閲覧室以外入れない。基本的にこども図書館の方を利用することになる。)座席の予約は、図書館1階の入口に入ってすぐの所にある端末機で行う。

韓国では最近、この区のような子ども図書館の建設が相次いでいるようで、私達もぜひ日本の子どもの図書館と姉妹館になりたいが、どこかいいところはないだろうか、と館長が話していた。

21時50分、バスに乗り込む。帰りは逆方向なので渋滞にも巻き込まれず、22時20分には出発地の COEX 西口に到着した。行きの3分の1の所要時間である。

### 3. 変わりつつある学校図書館

韓国の学校図書館の流れを大胆に振り返ってみると、1950～60年代の萌芽期には、もちろん規模・人員などの面で制約は大きいとはいえ、それなりの期待を受けて学校教育の中で活用されていたといえる。70～80年代には、受験に役に立たないと考えられることが多くなり、「読書センター」としての機能すら持ち得ないところが多く、沈滞期・暗黒期となる。しかし、90年代後半から徐々に再び活性化し、特にここ10年足らずの状況は、「読書センター」だけでなく、調べ学習などでの各教科との連携、図書館が主体となった各種行事、地域住民への解放など「学習・情報センター」への脱皮がみられ、資料費の増大、人員の配置などでも一定の前進が見られる。

こういった歴史や現状は、中央女子中・高等学校だけでなく、韓国の全国的な傾向と言ってよく、日本の状況ともかなり似たものがあるといえるだろう。

いまからちょうど10年前、国立国会図書館の「カレントアウェアネス」に掲載された大和田孝志さんの「韓国の学校図書館」は、次の一文から始まる。

韓国の学校図書館の多くは「放置されている」といってもよい状態に

置かれている。

これに続いて、学校図書館が単なる自習室や、合唱の練習空間として使われている事例が紹介されている。

90年代から今日に至る学校図書館の再活性化の要因については、第1章の略年表の中でも大学入試改革（修能の導入）があげられていたが、キム・ジョンソンは次の諸点を挙げている（『学校図書館の道を求めて』pp.79-90）。

- 第7次教育課程<sup>(4)</sup>の実施（2000年度～）。

このポイントは、「教える側中心の教育から学ぶ側中心の教育へ」「画一化から多様化・特性化へ」「規制と統制から自律と責務へ」「画一的均一主義から自由と平等の調和へ」「黒板とチョークから情報化による開かれた教育へ」「質の低い教育から評価を通じた質の高い教育へ」ということである。日本の1989年および1998年公示指導要領とかなり共通性が見られる。

- 市民団体が主導した学校図書館運動。
- 入試改革にともない、学校教育における読書の必要性が浮き彫りに。読書形態が学習読書と機能的読書に偏るといった問題はあったものの、読書の必要性は学校内で異論の余地なく認められるようになった。
- テレビで読書番組が盛んになった。
- 以上のような流れの中で、読書に対する社会的な関心が高まった。

## 4. 韓国の司書教師制度

### 司書教師の発令数

韓国国内の司書教師の発令数は、2003年度の数字では、全国でわずか232名にとどまっている。全国の小・中・高校数は9587校なので、配置率＝2.7%となる。しばらく前の日本を彷彿とさせる数字である。

翌2004年度には若干増えて全国で262名となったが、うち120名がソウル市に集中している状況である。

もっとも2001年度までは全国で多くても1桁以内、少ないとゼロという年（たとえば2000年）もあったことを考慮すると、2002年度から急増傾向にあるともいえる。

## 「2006年の韓国図書館界10大ニュース」にも

このような状況は、韓国図書館協会の「図書館文化」2007年1月号に掲載された「2006年図書館界10大ニュース」の中の次の項目からも看取できよう。

10大ニュースの中に「学校図書館活性化事業、成功と危機の中での持続」という項目がある。最終結果は順位を付けずに発表されているが、参考として93名にアンケート調査を行ったところ第7位であった（ちなみに第1位は「2006ソウル世界図書館情報大会開催」）。

この記事では、自治体の間で学校図書館への支援が広がっていることが紹介されている。水原（スウォン）市が学校図書館の資料購入の補助金として5億ウォン（約6千万円）を出した。仁川（インチョン）市では司書や司書教諭の資格を持つメンバーで「学校図書館お助け隊」を編成し、3人一組で学校に向いて、資料確保計画の立案から、購入・整理・廃棄、施設のリモデリング（改修・補修）、授業への活用など、各種相談に応じている。中央女子のところでも述べた、政府予算によるリモデリング支援も続いており、2006年は全国1462校で実施されたという。

その一方で学校図書館の活性化の障害になっているのが、なかなかすすまない司書教師の配置だとしている。

先ほど2002年度から急増傾向と書いたが、確かにその傾向は続いており、2005年はなんと200名あまり、また2006年も106名が司書教師として新規任用されている。しかし、それらを加えてもまだ560名程度、全国に1万校近くある小・中・高等学校に比べるとまだまだ足りない。

## 司書教師の資格

この点、日本では1997年6月に「2003年4月以降は、12学級以上の学校には司書教諭を置かなければならない」と定められ、期限を1年過ぎた2004年4月には、条件をみだす学校のほとんどに司書教諭が配置されていたという、事情を知らない人が見たら驚異的と思われそうなペースで、資格取得と辞令の発令がすすんだ。

その違いの原因は、おそらく資格の取得要件にある。

日本の司書教諭は、5科目10単位を夏の講習などで取得すればよい。促成

栽培という批判もあるが、取得用件の壁を低くすることで、とりあえず期限内にいちおう人員を「確保」して「配置」できた形になった。

一方、韓国の司書教師の要件は次のようになっている。(初中等教育法第21条②項別表2)

## 2級司書教師

1. 大卒で、在学中に図書館情報学を専攻し、所定の教職課程を履修した者。
2. 准教師以上の資格を持ち、所定の司書教師講習を受けた者。
3. 教職大学院で司書教育課程を専攻し、修士の学位を得た者。
4. 師範大学の卒業者で、図書館情報学を専攻した者。

## 1級司書教師

1. 2級司書教師の資格を持ち、3年以上の司書教師実務経歴があり、資格研修を受けた者。
2. 2級司書教師の資格を持ち、教職大学院で司書教育課程を専攻して修士の学位を得た者で、1年以上の司書教師実務経歴がある者。

もともとは1種類しかなかったのだが、2004年の法改正で、新たに1級司書教師の資格が設けられて2段階になった。従来の司書教師をもつ人はいったん全員2級司書教師となった上で、上記の条件を満たせば1級司書教師になれる。

さて、2級司書教師となる条件をよく読んで欲しい。2番目を除き、基本的には図書館情報学や司書教育を専攻する課程に在籍していなくてはならないことが分かる。さらに、「基本履修科目」という指定があり、分類学・目録学・図書館電算化・読書指導論・情報検索・情報サービス論・学校図書館運営・情報メディア論の8科目(または分野)の中から14単位以上履修し、それらの平均点が80点以上でないといけない(教育部公示第2000-1号別表第1)。5科目10単位を片手間に履修すれば済むというような安直なものではないのである。



すなわち、我が国の司書教諭が（必要な科目の上では）あくまでも「教諭」がメインであり、「司書」の部分は“付けたり”とも言えるのに対して、韓国の司書教師は、「司書」の部分にもそれなりの専門性を持った人材と考えているのである。（もちろん、教職課程の科目も、教育学概論から教育実習まできちんと単位を取得しなくてはならず、その上、こちらも平均点80点以上であることが求められる）

こうみてくると、中央女子の図書館に『韓国目録規則変遷史』の本が置かれていたのも不思議ではない。我が国では、司書教諭課程だけ履修してもそれだけでは資料の組織化を行う実践力という面では不足する場合が多く、おのずと学校司書（や、予算がある学校では購入時に着いてくる取次 MARC などのデータ）に依存することになる。司書教諭課程を履修している学生が、それだけでは飽き足らなくなって司書講習を受けに行き、それが現場に入ってから役に立ったという声をきく。（もちろん、司書教諭課程であっても、司書課程の演習レベルの授業に少しでも近づけようと、授業内容の充実に努力しておられる先生方がいらっしゃることも知っている。）しかし、韓国では司書教師は「教員免許を持つ司書」なのである。自力で資料の組織化ができるのである。

中央女子の図書館を見た限りでは、きわだってすぐれた実践を行っているというほどではまだないが、専任の司書教師と事務職員やボランティアといった人材のもと、学校における活用度は着実に増しているといえるだろう。おそらく、韓国の学校図書館全体についても同様のことが言えよう。

また、1983年という非常に早い時期から司書教師を雇用していたという意味では、本校は、全国的に見ると「数少ない優れた事例」と言えるかも知れないが、彼女の奮闘によって図書館の充実が徐々に図られていったという点については、本校の後を追う学校が次々と登場しているし、今後もさらに増えることであろう。その学校の中には、資料の組織化に関する専門書が書架に並んでいる学校もいくつかあるに違いない。

ひるがえって日本の状況を見るに、まず司書教諭課程の壁の低さは上でも述べたとおりであり、これは1980年代から何度も指摘されていることである。人員の点では、形の上では（形の上でのみ）12学級以上の学校のほぼ100%に

司書教諭が配置されているとはいうものの、定数の加配もされず、十分な業務を行うことができない。それを補うはずの学校司書も不安定な身分のままの雇用が多い。また、「総合的な学習の時間」の導入には本来なら学校図書館の3要素のうち「資料」「司書」（もちろん「施設」も）の充実と、担当教員の専門性の向上が必要なはずなのに、それをせずに見切り発車で導入してしまい、各担当教員が試行錯誤ですすめる中、中途半端という批判を浴び、あげくのはてには学力低下の要因の一つにされようとしている。

韓国という国は動き出したら早い。人口は日本の3分の1、面積はおよそ4分の1というコンパクトさもあって、あっという間に全国にブロードバンドのネットワークが張り巡らされた。日本の学校図書館が再び「図書館」時代に戻らないために、隣国に学ぶべき所もあるのではなかろうか。

## 5. 感想など

図書館見学では、限られた時間をいかに有効に活用するかが大切である。ということを実感した。

中央女子中・高校もそうだが、本大会で実施された図書館ツアーは大部分が半日コース、つまり9時に大会会場のCOEXに集合し、12時に戻ってきて解散である。この中にはバスによる移動時間も含まれるので、正味の見学時間は1時間程度となる（中央女子の場合、校舎に入ったのが10時00分、校舎から出てバスに乗り込んだのが11時08分であり、それも乗り込んだのはほとんど最後に近い方だった）。この限られた時間を有効に利用しようと思ったら、漫然と見学していてもダメである。自分なりの何らかの視点を持って見学したり説明を聞いたりしなければ、見えるものも見えず、質問できることも質問できない。したがって、事前にどれだけ情報を仕入れているかがカギになる。

今回の訪問前に、日本にいる間に中央女子中学校、高等学校、図書館のウェブサイトアクセスして一通りは目を通したつもりであった（そういった作業は、15年前にはまず不可能なことであったし、10年前でもかなり難しかった）。しかし、現地に行ってIFLAの大会発表を聞いたり、大会参加者と対話したり、そして実際に図書館を見学していくなかで、それまで気に留めなかつ

た疑問点が新たに次々と浮上する。そのころになって現地の大型書店に入ると、これまた現地到着直後には目に入ってこなかった学校図書館関係の興味深い本の存在につぎつぎと気づくのである。せめて『学校図書館運営の実際』だけでも、到着してすぐにこの本の存在に気づいて買って大まかに目を通しておけば、もっと充実した見学ができたのと思うのだ。しかし考えてみれば、実際に見学したことによって、新たな問題意識が evoke されたのだから、仮に到着直後に読んだとしても、内容の面白さの半分ぐらいは気づかずに読み過ごしていたかも知れない。

かくて、今後の課題をたくさん積み残したまま、旅は終わるのである。もっとも、その結果、次回は何を見ようか、調べようか、という旅の計画を立てる楽しみが残るとも言える。一度で全てが解決してしまったらそのほうがつまらないだろう。次回の渡韓時に（いつになるか分からないが）今回の見学地をぜひ再訪してみたい。

また、本稿の第4章と第5章は相当雑駁な論考である。ここでとりあげた問題点についてあらためて緻密に考察することも、今後の課題と考えている。

## 謝辞（順不同）

中央女子中学校・高等学校図書館司書教師の徐敬恩（ソ・ギョンウン）先生

英語通訳のヤン・ヒョン先生（英語科）

日本語ガイドの宋玟璟（ソン・ミンギョン）さん（同校卒業生）

蘆原こども図書館・情報図書館の朴美英（パク・ミヨン）館長

以上の皆さんには、現地で詳しい説明をしていただきました。

同志社大学の中村百合子さん

明治大学の小林卓さん

国立国会図書館の大和田孝志さん

柏崎市立図書館の洲崎匡さん

ソウル読書教育研究会会長の宋永淑（ソン・ヨンスク）さん

韓国芸術総合学校芸術情報館司書の曹在順（ジョ・ジェスン）さん

瑞草（ソチョ）こども図書館司書のイ・ナギョンさん

以上の皆さんには、同じ見学コースに同行しつつ、率直な対話の相手となっていていただき、見学対象館と図書館に対する考察を深めることができました。

そして、韓国で出会った日韓の図書館関係者の皆さん、IFLA 大会を支えてくださった多くの関係者の皆さんの尽力がなければ、大会もバスツアーも実現しませんでした。

皆様方に心から深く感謝の意を表します。

## 注

- (1) Korean Library Automation System. 国立中央図書館が開発した、図書館の電算化システム。
- (2) 大学修学能力試験（略称・修能）。毎年11月に行われる大学入試で、日本のセンター試験に相当する。日本と異なり、各大学が個別に科目試験を行ってはいけないことになっているため、学科試験は原則として修能の一発勝負であり、各大学の2次試験では論述、面接、実技などが行われる。このため、私立大も含め、原則として全ての受験生が受験する。それまでの受験勉強がともすれば瑣末な知識の詰め込みになりがちだったことに対する一つの対策という面があったといわれており、2次の論述に向けて幅広い読書が求められるようになったという。
- (3) 一例として、地下鉄の駅構内の階段には「☺文化市民は左側通行☺」というステッカーが貼ってあった。
- (4) 教育課程：我が国の指導要領に相当する。

## 参考情報源

- 사서교사 전문성 향상 [司書教師の専門性の向上], 2006학년도 여름방학 사서교사 직무연수 교재 [2006年度夏期休暇司書教師職務研修教材], 서울초중등 학교도서관 교육연구회 [ソウル小中学校図書館教育研究会], 2006, 8.
- 『중앙여자중등학교 도서관 [中央女子中・高等学校図書館]』(パンフレット), 2006, 8.

同館ウェブページ <http://www.centerlib.org/>

(last accessed 2007/04/30).

同中学ウェブページ <http://www.jungang1940.ms.kr/>

(last accessed 2007/04/30).

同高校ウェブページ <http://www.xn--299a277bvmaz7h.kr/>

(last accessed 2007/04/30).

蘆原こども図書館ウェブページ <http://www.nowonlib.seoul.kr/>

(last accessed 2007/04/30).

蘆原情報図書館ウェブページ <http://www.nowonlib.seoul.kr/>

(last accessed 2007/04/30).

両図書館のパンフレット ([2006. 8 ?]).

송기호 [ソン・ギホ]. 학교도서관 운영의 실제 [学校図書館運営の実際]. 개정판 [改訂版]. 한국도서관협회 [韓国図書館協会], 2005.

김종성 [キム・ジョンソン]. 학교 도서관 길찾기 [学校図書館の道を求めて]. 나라말, 2004.

Han, Yoon-ok. A study of the school library policy and it's[sic] development in Korea.. 71th World Library and Information Congress[Oslo], presentation manuscript. 2005.

大和田孝志. 韓国の学校図書館. カレントアウェアネス, No.215, 1997. 7. 2006년 도서관계 10대 뉴스 [2006年図書館界10大ニュース]. 도서관문화 [図書館文化], 48(1), 2007. 1.

사서교사 및 사서실기교사 자격증 취득방법 [司書教師および司書実技教師の資格証取得方法]. <http://user.chollian.net/~chjeon12/librarian/teacher-librarian.html> (last accessed 2007/05/02).

#### 付記：

本稿は、2006年9月22日に同志社大学新町キャンパスで行われた「IFLA 韓国大会・北欧学校図書館ツアー報告会」での発表内容に加筆したものである。

(まつやま いわお。玉川大学通信教育部助教授)